

変わる日本の「暮らし」と「まち」

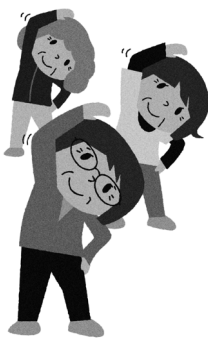
illustration: Shigeyuki Sakata

若いパワーで団地を元気にする
「コミュニティ拠点」だんだんテラス

京都府八幡市・男山団地
男山地域のまちづくりに
関する連携協定
(2013年●平成25年)

阿部民子

text by Ranko Abe



すっかり秋色に染まった空に、「ラジオ体操第一」の元気なかけ声が響く。ここは京都府八幡市にある男山団地の広場。聞き慣れた音楽に合わせて、集まった人々が気持ちよさそうに体を動かしている。スタンブカードに押印した後は、お楽しみの朝市だ。リーフレタスやサツマイモなど、旬の新鮮野菜がどれも100円の安さ。見る見るうちに、台の上は空になった。ラジオ体操に参加していた大塚寿美子さん、天兒久枝さん、山本文代さんの仲良しシニア3人組に

誰もが気軽に集える拠点

お話を伺うと、「この体操は1年365日、毎朝10時からやっている。用事のない日はここに来て、体操しておしゃべりしているのよ」「年がいくと体を動かさなかんし、体操のおかげで毎日規則正しく生活できて、ありがたい」「こういう催しをやっていると、外へ出ようって気になるしね。みんなともここで仲良くなって、美味しいとこ食べに行ったり、ええグループよ」と楽しみに答えてくれた。

るA地区は「子育て支援」を打ち出し、集会所を子育て世代をサポートする『おひさまテラス』に改修。B地区は「高齢者支援」として、中層住宅にエレベーターを設置するほか、地域包括ケア複合施設YMBTを開設。C地区は、DIY特区「ココロミタウン」を設け、賃貸住宅の退去時原状回復義務を一部免除。居住者がDIYやセルフリノベーションにチャレンジしやすくするなど、意欲的な取り組みが生まれている。まさに「だんだんテラス」と名付けられたように、時間とともに「だんだん」と進んでいるのだ。

冒頭の体操や朝市も、住民活動支援プロジェクトの1つ、「だんだんテラス」の活動の一環だ。「だんだんテラス」とは、関西大学の学生が中心となって運営している地域のコミュニティスペース。商店街の空き店舗を改装したテラスは、誰でも利用が自由。取材日もフロアのテーブルで談笑するグループや、書棚に置かれた本を見に来る人などでにぎわっていた。ここを拠点にさまざまなコミュニティ活性化の活動も展開している。

テラスの立ち上げから関わっている地域コーディネーターの辻村修太郎さんに設立の経緯を聞いた。「このテラスは、僕が所属していた関西大学工学部建築学科の団地再編プロジェクトから生まれたものです。住民の方々とともに男山団地の課題を話し合う中で、『気軽に集まれる場所がほしい』との声にこたえて生まれました」

誰でも気軽に立ち寄れるようにと、365日、10時から18時のオープン時間には関西大学の学生らが常駐。ラジオ体操や朝市のほか、住民が主体的に行う催しなども開かれていく。6年経った今では、午前中はシニア世代、放課後は子供たちが集まる、団地と地域のコミュニティ拠点として定着した。「最初は懐疑だった40年来の住民の方から、『3年くらいでいなくなると思っただけ、ようやくとるな』と声をかけてもらいました」とうれしそうに教えてくれた。

新たな活動も続々展開中

「だんだんテラス」は、新たな取り組みにも積極的だ。取材日は、「粗大ごみの回収支援システム構



3人がかりで運んだのは団地階段をようやくすり抜けた大きなソファ。

京都市、大阪市の両中心部まで、約30〜50分。京都府南部の八幡市にある男山団地は、UR賃貸総戸数約4600戸と分譲約1500戸ある。人口は八幡市の約3分の1に及ぶ西日本屈指の大規模団地だ。

1972年の供給開始から、今年で47年。団地の新たな活性化のために、2013年には京都府、

八幡市、関西大学とUR都市機構で連携協定を締結。4者は「連携協議会」を結成し、さまざまな活動や交流を生むためのプロジェクトを進めている。

URの山本俊夫は「男山団地はAからDまでの4地区に分かれていて、それぞれ特徴的な取り組みを行っています」と説明する。例えば、団地の一番南に位置す

築の社会実験」を実施。辻村さんの後輩である関西大学体育会サッカー部員が、団地住民の粗大ごみ出しをお手伝い。2日で22件のお宅を回り、箆箆やソファなどを運び出した。

紺色のサッカー部ジャージに身を包んで参加したのは、1回生の榎山佳佑さん、赤星亮太さん、秋篠亮太さん。「感謝の声をかけていただいたうれしい」「身体には

改修する取り組みも進行中だ。「高齢者と子供の間にいる学生さんが、さまざまな世代、またURと住民の方々をつなぐ役割を果たしてくれています。我々もこうした活動を通して住民の方々の暮らしをサポートするだけでなく、暮らしをサポートするだけでなく、何を望まれているのかを知り、今後の改修などにフィードバックしていきたい」とURの山本。

「卒業した学生がお盆に帰ってきて、嫁さんを連れてきて、顔なじみの住民の方と話が弾んでいることも。人が入れ替わる団地で地域づくりは難しいのではと思っていましたが、さまざまな活動を通して、学生にも住民の方にも愛着が生まれているようです。今後は住民の方だけでなく、外に出た人のパワーも集結し、

辻村さんは「高齢で大きなごみを出せないとか、ごみの出し方がわからない、などの声を聞き、企画しました」と趣旨を語る。

大きなソファを運んでもらった田島さんは「80歳になる一人暮らしの母が介護状態になり、使わなくなったソファをどうしようか1年前から悩んでいました。学生さんたちもとても感じがよくて、本当に助かりました」と喜ぶ。

他にも、団地住民にセルフリノベーションの希望を募集。京都府建築士会と連携して、自分好みに

団地と地域の力を集めるパワースポットは、これからもさらに求心力を増していきそうだ。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社